

特集

座談会 「国際的な会計人材の発掘・育成 に向けて」

東京会議室より



奥左から新井武広氏、小川善平氏
手前左から熊谷五郎氏、鶯地隆継氏、秋葉賢一氏

ロンドン会議室より



三浦朱美氏

IASB 理事

おうち たかつぐ
鶯地 隆継

早稲田大学大学院会計研究科教授

あきば けんいち
秋葉 賢一

みずほ証券(株) 企画グループ
経営調査部 上級研究員

くまがい ころう
熊谷 五郎

新日鐵住金(株) 財務部 財務総括室 主幹

おがわ ぜんべい
小川 善平

IASB 客員研究員 / ASBJ 研究員

みうら あけみ
三浦 朱美

〔司会〕 ASBJ 副委員長

あらい たけひろ
新井 武広

座談会

「国際的な会計人材の発掘・育成 に向けて」

1 はじめに

司会：新井 企業会計基準委員会（ASBJ）の副委員長で、会計人材開発支援プログラムを担当しております新井です。本日は、お忙しいところをお集まりいただきまして、ありがとうございます。

本日の座談会の出席者は、会計人材開発支援プログラムで講師をしていただいています国際会計基準審議会（IASB）理事の鶯地隆継さん、早稲田大学教授の秋葉賢一さん、第1期のプログラムに参加された、みずほ証券の熊谷五郎さん、新日鐵住金の小川善平さん、あらた監査法人の三浦朱美さんです。本年1月から、熊谷さんはIFRS諮問会議の委員となっております。また、三浦さんは、ASBJ 出向後、IASBにVisiting Fellowとして出向されていまして、本日はロンドンからテレビ電話で参加していただいています。

それでは、鶯地さんから順に、自己紹介をお願いします。

鶯地 はい、IASBの鶯地隆継でございます。私は1981年に住友商事に入社し、入社時の辞令が主計部でした。入社した時は主計部というところが何をするとところか全くわかりませ

んでした。大蔵省主計局というのは新聞で見ることがありましたが、会社の中で主計部というものがあるのか想像が付きませんでした。というのも大学時代は経済学部で会計とはほとんど縁のない生活を送っていましたので。結局入社以来、一貫して主計部で、途中ロンドンに5年ほど駐在しましたが、2011年に退職して、IASBの理事になるまで30年間経理の仕事をしました。IFRSに直接かわるきっかけになったのは2006年にIFRIC（現在のIFRS解釈指針委員会）の委員になったことでした。それ以前より経団連の活動や、ASBJの専門委員なども務めさせていただいていましたが、IFRICの委員になって、直接国際会議の場に出てみて、新鮮な驚きもあり、その意味では、私はこの会計人材開発支援プログラムの活動に大きな期待を持っています。

秋葉 現在、早稲田大学大学院会計研究科で財務会計を教えております秋葉賢一です。もともとは監査法人に所属しており、2001年から8年間、ASBJに出向しておりました。その時にIFRSとのコンバージェンスやIASBとの会議などを通じて、IFRSに接しました。その後、大学院ではIFRSを含む財務会計を教えております。また、この会計人材開発支援プログラムでは、アカウンティング・プログラムの講

師を務めています。本日は、どうぞよろしく
お願いいたします。

熊谷 みずほ証券の熊谷五郎と申します。
第1期の会計人材開発支援プログラムBに
参加させていただきました。シニア向けプロ
グラムBの参加者の中でも飛び抜けて高
齢でしたが(笑)、とてもいい勉強、いい
刺激になりました。私は1982年に証券
業界に入りました。いくつか会社を渡り
歩きました後、現在の勤務先では、グ
ローバル金融資本市場改革や会計基
準について調査研究をしております。30
年以上のキャリアのうち、日本株の投資
調査・運用業務の経験が20年にも及
びます。財務分析や投資の専門家であ
るとは自負しておりますが、特に会計
基準について詳しくありません。しか
し2009年5月日本証券アナリスト協
会の企業会計研究会委員に就任して以
来、会計基準の世界に関わるようにな
りました。現在はASBJの専門委員会
委員をいくつかお引き受けしているほ
か、今年1月からはIFRS諮問会議及
びCMAC(IFRS財団の資本市場諮問
委員会)の委員を務めております。

小川 新日鐵住金の小川善平と申します。
会計人材開発支援プログラムAの1期生
として参加させていただきました。大変
有意義で貴重な経験をさせていただきました。
現在、同社財務部財務総括室に所属し
ており、会社の財務計画や事業再編・
資本政策等を担当しております。2000
年に大学卒業後、本社財務部門で資
金計画や決算実務・開示資料作成を担
当した後、製造現場である製鉄所の経
理業務(管理会計)や全社決算方針の
策定業務等の経験を経て、2009年か
らロンドン・ビジネス・スクールに留
学しました。帰国後は全社連結決算・
国内外500社程度あるグループ会社
管理、新日鐵住金の経営統合作業を
経験し、IFRSを含めた会計制度の
意見表明や基準改訂後の当社グル
ープの業務設計にも携わりました。本
日は、どうぞよろしく

お願いいたします。

三浦 三浦朱美です。昨年夏からASBJ、
本年1月からはIASBに出向して
おります。このプログラムには1期生
として参加させていただき、感謝
しております。大学時代は監査法人
等にも非常勤勤務していましたが、
学部の影響で事業環境整備のため
の制度改革等に興味を持ち、卒業
後の2001年からは経済産業省に
勤務しました。企業再編・企業統
治や海外の法整備支援等の政策
立案に関与したほか、2004年か
らワシントンDCのジョージタウン
大学経営学修士に留学しました。
IFRSはじめ会計制度に関する
思いが一貫して強く、2008年以
降、あらた監査法人(PwC)にて
IFRS適用支援や研修等を主業
務としていました。特に年金会計
が好きで、IASBでもIAS第19号
のプロジェクトや解釈等を担当
しています。

2 会計人材開発支援プログラムの 設置の経緯と意義

新井 自己紹介、ありがとうございました。
まず、私から、会計人材開発支援
プログラムのPRも兼ねまして、当
財団(公益財団法人財務会計基
準機構(FASF))が会計人材開発
支援プログラムを設けるに至った
経緯について簡単に説明いたし
ます。

当財団では、2010年10月に、
当時の萩原理事長の私的な諮問
機関として「構造改革委員会」
を設置して、当財団の組織や業
務執行方法の見直しを行い、そ
の一環として、人材戦略につ
いて検討を行いました。検討の
結果、国際舞台において我が国
の存在感を示し、会計基準開
発に中心となって取り組むこ
とができる人材を中長期的な
視点に立って発掘・養成して
いくため、タスクフォースを
設けてアクションプランを
策定し、実施することとしま
した。

具体的には、国内外の情勢を
踏まえ、中長期

的な視点に立って国際的な会計人材の育成をオール・ジャパンとして計画的かつ組織的に取り組んでいくことが肝要と考えました。そこで、日本経団連、アナリスト協会、JICPA、大手監査法人などの市場関係者や金融庁の協力を得て、2011年8月に「会計人材開発タスクフォース」を設置しまして、第1期の会計人材開発支援プログラムの検討に着手し、2011年11月に企業会計に関する知識と英語力の向上を図るプログラムをまとめました。そして、財務諸表作成者、財務諸表利用者及び監査人から参加者を募り、2012年1月に開講して2013年12月に終了しました。主に若い世代を対象としたプログラム「プロジェクトA」には、本日ご出席いただいています小川さん、三浦さんをはじめ財務諸表利用者、財務諸表作成者、監査人あわせて25名の方に、シニア層を対象としたプログラム「プロジェクトB」には、熊谷さんをはじめ11名の方に参加いただきました。

第2期は、第1期のプログラムの基本的なコンセプトを踏襲しつつ、その一部を見直し、会計基準開発に興味のある若い世代を中心に、財務諸表利用者、財務諸表作成者、監査人あわせて23名に参加いただき、今年5月28日から約1年8か月にわたりプログラムを提供することとしています。

そこで、鷺地さん、以前はIFRICの委員、そして、現在はIASB理事として活躍されていますが、このプログラムをどのようにご覧になられているか、伺えますか。

鷺地 私は、2006年の7月に初めてIFRICの会議に出席しましたが、そのときは、本当に右も左もわからず、本当にやっていたのかと思いました。もちろん当時で、25年経理をやっていましたし、総合商社の経理なので、幅広い知識を得る機会もあり、それなりの自信はあったのですが、やはり国際会議でしかも短時間の会議で解釈を確定していくという作



IASB理事 鷺地 隆継氏

業は大変難しいものでした。特に、英語でのペーパーの多さに圧倒されて、本当にASBJの皆さんには助けていただきました。

この会計人材のプロジェクトの話を伺った時に、本当に素晴らしいプロジェクトが立ち上がったなと思いました。特に、このプロジェクトの素晴らしいところは、会計士などといった特定のプロフェッショナルのみを対象にせずに、各分野から幅広く人材の卵を募集するという点です。もちろん知識や経験のばらつきもあるので、運営に当たられてきた新井さんは大変なご苦勞をされたわけですが、そのご苦勞は大変意味のあるものであったと思います。

新井 秋葉さんは、いかがですか。ASBJの主席研究員として在籍され、その間、EUにおける日本基準のIFRSとの同等性評価問題、IASBとの定期協議、米国財務会計基準審議会(FASB)の代表者の定期協議など、様々な場で国際的な議論に参加されてきましたが、国際的な会計人材はどのような点に力点をおいて育成していく必要があるとお考えでしょうか。

秋葉 いろいろな見方があるとは思いますが、我が国でしばしばいわれる「意見発信」という観点でいえば、日本の固有の事情だけでは



早稲田大学大学院会計研究科教授 秋葉 賢一氏

なく、他でも通じる理屈を有することが必要ではないかと思えます。また、IASBもそれを取り巻く人々も、場合によっては、幅広く理解される考え方ではなく、一面を強調する考え方で議論している場面が少なくないように感じます。このため、「なぜ、そのような扱いが財務報告の目的に資するのか」「どのようなロジックで改善といえるのか」などを、常に考察できる力が必要ではないかと思えます。そのためにも、基本線となる見方を整理していないと、適切な主張や譲歩ができないと考えられます。また、IASBなどでの問題意識が、我が国とは異なる場合もあり、その点で相手が考えている問題点を理解することも重要かと思えます。理想的には、さまざまな論点を受け止めつつ、問題を解決できる力が必要であり、そのために、私自身、微力ながらもこのプログラムにおいて役立っていることを期待しています。

新井 今、お二人からお話のありました点は、このプログラムのベースとなる考え方や取組み方針と相通じるものかと考えています。

金融資本市場のグローバル化に対応して、2008年9月のリーマンショック後に継続して

開催されてきましたG20首脳会議での首脳宣言では、単一で高品質な国際基準の策定についての提言が継続して出されてきました。また、我が国においては、2009年6月の企業会計審議会での提言を踏まえてIFRSの任意適用が開始され、2013年10月からは任意適用要件が緩和され、有価証券報告書提出会社4,000社強が任意適用可能となったと伺っています。このような状況下、会計基準開発の国際舞台で我が国の存在感を示すとともに、我が国の状況も踏まえた国際的な基準開発を求めていくことは、ますます重要な施策であると考えています。これに対応するためには、秋葉さんをご指摘された視点が重要であると思えますが、我が国から質の高い意見発信を行うとともに、IASB理事やIFRS解釈指針委員会委員、IFRS諮問会議委員、IASBのプロジェクト・マネージャーをはじめとして、さまざまな国際的な組織や会議体のメンバーに優秀な会計人材を継続的に送る取組みを強化する必要があると考えています。このような認識に基づき、このプログラムを立ち上げ、運営してきました。

そこで、実際にこのプログラムに第1期生として参加された方々に、当時を振り返り、参加された動機をお伺いしたいと思います。熊谷さん、小川さん、三浦さん、2年前を振り返り、このプログラムに参加された動機をお伺いできますか。

熊谷 このプログラムが始まった時期は、私自身が会計基準の体系的な勉強の必要性を痛感していた時期でした。私には銀行アナリストとして我が国の不良債権問題に正面から向き合った時期があります。そういう経験もあり、現在の部署では、サブプライム危機発生直後からリアルタイムで金融危機の進展を追いかけていました。G20の議論も最初からフォローしていましたが、「単一で高品質な会計基準の策定」は重要なアジェンダの1つと考えておりました。

た。また、ちょうど2009年6月の企業会計審議会提言により、我が国でもIFRS導入機運が高まっていた時期でしたので、IFRSにも関心を持つようになりました。それとは前後しますが、2009年5月以来、アナリスト協会の企業会計研究会委員を務めることになりました。そのようなことが重なって、自然とユーザーの立場から会計基準がいかにあるべきかを考えるようになっておりました。その意味で、会計人材育成プログラムは、私にとっては大変魅力的な機会でした。

小川 プログラム開始時は、新日鐵と住友金属が合併を決定した直後であり、統合までの1年半の経営統合作業とちょうど重なるタイミングで本プログラムがスタートしました。また、IFRS適用については、今後の海外市場等からの資金調達迅速な対応、M&Aの効率化（Form-F4問題の負担軽減、JVパートナーとのコミュニケーションの効率化）、日本基準を適用し続けることのリスク（レジェンド問題の再燃）、グローバル経営管理の推進といった観点から、企業側にもIFRS適用のメリットはあると考えており、当社グループもIFRS適用を念頭に、グローバル基準の策定を含めた準備を開始した頃でした。会計の果たすべき役割が企業経営の日々の営みの成果を財務諸表という形で社内外にその真価を問うことであるならば、作成者側としても、投資家の真のニーズをくみ取り、監査実務も踏まえた概念フレームワークの構築や高品質の会計基準の設定に深く関わる責務を負っていると感じておりました。こうした中、本プログラムのご案内をいただき、作成者、利用者、監査側の皆様と真摯に議論できる非常にすばらしい機会だと考え、参加させていただきました。

三浦 当時、PwCで担当していた主要なIFRSプロジェクトが落ち着き、中長期のキャリアプランを考えていたところでした。もともと

と国際的な制度整備に強い関心があり、IFRSのあり方にも実務を通じて考える場面が多かったところ、当方のコーチング担当パートナー経由でこのプログラムの発足を教えていただきました。ASBJやIASBへの出向自体は、当時はまだ将来の夢の1つでしかなく、多くの新しい仲間と切磋琢磨できるであろうという点、ASBJとも接点を持てる点等に強い魅力を感じました。

3

国際的な会計人材開発支援プログラムの内容

新井 今、熊谷さん、小川さん、三浦さんのお話を伺い、第1期の応募者の最終選考に向けて個別面談した当時の皆様のこのプログラムに寄せる期待や熱意を思い起こしました。

では、この会計人材開発支援プログラムの内容の話に入りたいと思います。まず、私から、このプログラムの内容について簡潔に説明いたします。対象者は、先ほど、驚地さんからもお話がありましたが、会計人材の育成という観点から、市場関係者である財務諸表作成者、財務諸表利用者及び監査人としています。また、会計人材全体の底上げも重要な課題ではありますが、先ほど申し上げました、このプログラムの趣旨を踏まえて、会計に関する知識や英語力について一定水準以上の者を対象とし、会計基準に関する専門的知識や英語力の更なる向上を柱としています。そして、このプログラムは、各社及び各団体で提供される研修プログラムと有機的に結び付けられるものであることを期待しています。

具体的なプログラムの内容としては、会計と英語力を2本柱として、IFRS開発の基礎にある考え方（概念フレームワーク）のより深い理解を図り、論理構成力を磨くとともに、英語力の向上に主眼を置いたプログラムを用意しています。お手元にお配りしましたものは、第2期

のプログラム構成として、第1期のプロジェクトAとほぼ同じ7つの個別プログラムから構成されています（図表を参照）。

そこで、秋葉さん、第1期のアカウンティング・プログラムを担当していただきましたが、IASBの個々のIFRS開発の背景にある考え方、概念フレームワークの理解を深めるため、参加者の理解度も踏まえながら、いろいろと趣向を凝らして取り組んでいただきました。どのような形でアカウンティング・プログラムを進められたのか、ご紹介いただけますか。あわせて、第1期生に対してどのような印象を持たれましたか。

秋葉 アカウンティング・プログラムは、

IFRS開発の基礎となる考え方の理解や、概念フレームワークと開発中のものも含めた個々のIFRSとの関係、また、IFRS自体の知識の向上などを図ることを目的としてきました。また、IFRSを相対化してみることができるよう、日本基準の基本となる考え方の理解にも努めました。

具体的には、概念フレームワーク自体についてのプレゼンテーション、また、同時に、私から提示させていただいた事前課題についてのプレゼンテーションを、割り当てた担当者から行ってもらい、その後全員でのディスカッションをする手順で進めました。1年目の事前課題

第2期会計人材開発支援プログラムの構成

目的	1年8か月	プログラム終了後
知識	ASBJ 基調プログラム	
知識 英語	IASB update プログラム (IASB の基準開発動向等)	IASB の各種アウトリーチ・ラウンドテーブル・ワーキンググループへの参加
知識	Accounting プログラム	
英語	Writing トレーニング	IASB 及び ASBJ への出向
	語学研修 (所属元)	ASBJ の各種専門委員会の 専門委員
英語	Discussion トレーニング (語学研修の補完)	
人的交流	国際舞台で活躍する者との交流プログラム	
英語	IFRS 財団アジア・オセアニアオフィスを活用したプログラム (可能な場合)	※プログラム終了後、希望者には、一部のプログラムを継続受講する機会を提供する予定

には、書かれているIASB概念フレームワークの理解と、それを踏まえて「混合属性モデルの是非」や「リサイクリングの必要性」といった基本的な論点を扱いました。さらに、2年目は、応用的な課題を示すことで、理論構成力を高めたつもりです。その中には、IASBでの議論を勘案し、「オペレーティング・リースによる「モノ」のオンバランスと「ヒト」のオフバランスとの関係」や「持分法の位置づけ」、「資本の測定の見直しの意義」などのテーマも取り上げました。

第1期生の皆様は、お忙しい中、事前課題に対し準備を行っており、また、当日のディスカッションにおいても真剣に取り組んでいました。その結果、自らの理解を確認するとともに、他人の意見を斟酌することにより、必要に応じて自分の考え方を軌道修正することができたのではないかと思います。人によって、差はあるとは思いますが。

新井 鷺地さん、IASB会議でのロンドンと東京の往復を含め、非常にお忙しい中、IASBアップデート・プログラムを定期的にお願ひしてきましたが、IASBで検討中の議題を題材にして、参加者に意見を求めるなど、双方向のやり取りを重視されていた点が記憶に残っています。どのような点に力点を置かれて進められましたか。また、第1期生の印象もお伺いできますか。

鷺地 苦勞をした点は、参加された方がどれだけ直近のIASBのトピックをフォローされているか分からなかったため、どのレベルでお話しをしてよいか迷ったことです。会計士事務所のテクニカル部門の方たちは、ある意味私以上に直近の議論の詳細をご存じで、具体的な話ができます。一方で、一般のプリペラーの方は、直近の議論についてはあまりフォローしている時間はないと見受けられました。したがって、話をするときには、アップデートをすると

いうことに主眼を置くのではなく、直近の議論の重要な論点について、あなたがボードメンバーだったらどのように発言するかを聞いてみるという手法を取りました。若い方も率直にご自身の意見を述べられて、私自身も大変参考になることが多かったです。とはいえ、第1期生の方々は比較のおとなしい感じの方が多くて、ご自分で手を挙げて発言される方は思ったよりも少なかったという印象です。ところが一人ひとりあててみると、大変すばらしい発言をされる。しっかりと理論と実務を組み合わせ、ソリューションまできっちりと言言をされる方が多いのに驚きました。これは日本人の特徴ですが、あてられたらいつでも発言できるように完璧な準備はするけれども、自分からそれを披露するためにでしゃばらないという美德があるようです。ただ、国際会議ではこれでは、結局、自分の意見が残らないので、さらなる積極性が必要だと思います。

新井 今、お二人の講師から、第1期生の印象もお伺いしました。第1期においては、秋葉さんや鷺地さんの講座のほか、ASBJの国際担当ディレクターでFASB国際研究員の川西安喜さんによるプロジェクトAのアカウントリング・プログラム、英語力に関しては、あずさ監査法人のMarkus Fuchsさん、あらた監査法人のTrevor Tisseverasingheさんに講師をお願いしましたディスカッション・トレーニング、新日本監査法人のIonson Gregさんに添削をお願いしましたライティング・トレーニング、山田辰己前IASB理事、藤沼亜起IFRS財団評議員会副議長、島崎憲明IFRS財団評議員（当時）、齊藤惇日本取引所グループCEO、氷見野良三金融庁審議官などを講師としてお招きした国際舞台で活躍する者との交流プログラム、西川郁生ASBJ委員長（当時）などによるASBJ基調プログラムなど、様々なプログラムを提供しました。そこで、第1期生の熊谷

さん、小川さん、三浦さん、このプログラム全体の感想や、個別のプログラムのうち特に有益と感じたものについて、お伺いできますか。

熊谷 プログラム全体として、とてもバランスが取れていると思いました。特に秋葉さんの講義では、IFRS に書き込まれていない点まで含めて、IASB 的思考のあり方や日本の考え方との違いを教えてくださいました。それまで体系的に会計基準の勉強をしたことがなかったので、とても勉強になりましたし、毎回楽しみでした。他の参加者の方々の会計基準に対する見識の深さに圧倒されることも多く、とても刺激になりました。特に2年目は、専門的な話になってすごく難しかったのですが、自分なりの視点で極力議論に参加するように意識しました。もっとも、随分ピントのずれた発言をして冷や汗の連続でしたが。

また、アナリストやポートフォリオ・マネージャーとして、長年外国人投資家と何千回と議論してきました。しかし会計基準については全くの門外漢でしたので、ディスカッション・トレーニングで、会計基準の専門的な議論を英語で行う機会に恵まれたのは大変いい経験になり



みずほ証券(株) 企画グループ 経営調査部
上級研究員 熊谷 五郎氏

ました。年甲斐もなく、つい熱くなりすぎて、講師の Markus さん、Trevor さんを困らせていたのではないかと反省しております(笑)。

IASB アップデートや ASBJ 基調プログラムでは、最新の論点や設定主体の皆様の問題意識にまで直接触れることができ、様々な論点を深いところで理解するのに役立ちました。また、国際舞台で活躍する者との交流プログラムを通じて先人の方々のご苦勞やご経験をシェアさせていただき、自分が IFRS 諮問会議の委員になってみて、とても参考になっています。

小川 カリキュラム全体の構成・内容ともに非常に充実しており、実務の経験を積み重ねた参加者の皆様との議論の内容はレベルが高く、大きなプレッシャーでもありましたし、大いなる刺激を受けました。概念フレームワークについては、基本的な考え方やその背景、財務諸表論としての理論づけを含めて川西さん、秋葉さんから体系立てて深く勉強させていただきましたし、日本として発信するならばどのようなロジックで通すべきかを含めて教えてくださいました。また、IFRS アップデートや ASBJ の基調講演等により、現在の IASB ポート内での議論の内容や各国の反応等を含めて常に情報をアップデートしていただき、個別基準の公開草案に対する理解や意見発信のためにも非常に役立ちました。事前課題のプレゼンテーションやグループディスカッションにおいては、日本語で読んでも難解な概念フレームワークや個別基準に関する自身の意見を、相手側の主張やスタンスも熟慮しながら、英語で相手に伝え、説得し、納得していただくことの難しさを痛感いたしました。相手の立場に理解を示しつつも、時には相手の土俵に立って理屈として納得的な議論を行うことは、実ビジネスでも直結する非常によい訓練になりました。

三浦 デイバート形式の英語のディスカッションは特に勉強になりました。チーム内で事

前にメールで夜中まで意見交換して準備をしますが、相手チームや講師との関係で想定と異なる展開になることもあり、柔軟な対応についての勉強になりました。立論から意見のすり合わせまで当日の現場で全て準備せざるを得ない回もありましたが、制限のある中でのチームワークという良い経験になりました。2年目からはプロジェクトBの皆様とも合同でした。プロジェクトAメンバーにとっては草野球選手が大リーガーと混ざって試合するような気分で、当初は冷や汗をかきましたが、1年間、胸をお借りいたしました。特に熊谷さんは同チームでとてもお世話になりました。実際IASBに来てみると、理事・委員等から反対を含むコメントをいただき、スタッフとして理由や背景を口頭で説明する場面がありますので、臆せず、かつ論理的に礼儀正しく英語で自分の見解を伝える必要があります。そういう意味でも実践的でした。IASBアップデートや概念フレームワーク等に関する他のプログラムも、必要なスキル・知識の向上に大変役立ち、当時のPwCでの業務においても、深く考える良い刺激を受けました。単に基準や公開草案等がどうなっているかではなく、「なぜ」そうなっているか、「なぜ」日本基準等と異なるか、を論理的に説明できるとぐっと伝わりやすいのです。動向の解説にあたっては、要約説明ではなく、「なぜこの提案なのか、各観点からどのような別意見もあり得るか」と自ら考える姿勢がプログラムを通じて身につきました。どのプログラムも、出席者に考えさせるテーマと進め方のため、毎回、新鮮な気持ちで楽しく参加しました。

新井 このプログラムは財務諸表利用者、財務諸表作成者、監査人から構成され、複数のグループに分け、さまざまなセクターの方と交流できることも1つの特徴にしています。小川さん、この点はいかがでしたか。

小川 メンバーの構成も含めて非常に有意

義でした。欧米各国が基準設定に主導的役割を果たし自国の国益を巧みに保持する一方、日本の発信力は相対的に弱い現実を、ロンドン留学中に目の当たりにしました。会計の世界に限らず、金融資本市場規制であっても、世界のルール設定に日本の関係者が議論を重ね「一枚岩」となって世界に発信していくことが日本の国際的な地位を高め、国益に資するはずであると常々考えておりました。加えて、作成者側としては、利用者側にとって真に有益な開示情報が何なのか、グローバルな社会全体としてのコスト・ベネフィットを踏まえた投資判断に資する情報は何かを真摯に議論したいと考えておりました。そういった意味では、各セクターの皆様、各業界の皆様が同じテーブルについて、相手の真のニーズや具体的な課題を互いに理解し、議論を重ねることができて非常に有意義でした。事前課題はテーマも理論的なものから実践的なものまで幅広く、今振り返ると、週末のうち1日は会社で経営統合作業、残る1日は事前課題に徹するという激動というか悲壮感をも感じる辛い日々でした(笑)。参加者の皆様も仕事を抱えながらでしたので、チーム内での事前



新日鐵住金(株) 財務部 財務総括室 主幹

小川 善平氏

の意見のすり合わせは当日の深夜から明け方までメールでやりとりしていました。今となっちはいい思い出ですし、同じ境地を経験したからこそ、第1期生の固い絆も生まれたと思います。

三 浦 小川さんのおっしゃるとおり、業務との両立は大変なときもありましたが、だからこそ参加者同士とても仲が良かったですね。イギリス出発前にはプロジェクト A の皆さん中心に壮行会やメッセージ等もいただき、感動しました。講師や FASB/ASBJ の皆様等とも何度かご一緒させていただき、盛り上がりすぎて失礼がなかったかも心配なほどですが（笑）、経験豊かな皆さんとお話できる楽しい機会でした。グローバルに優れた基準が開発されるよう建設的に意見発信して貢献することは、日本のみならず IASB や他の国にも有益な場面も多いと思います。

新 井 第1期終了後も、いろいろと交流が続いているということですね。このプログラムが人材交流の場として継続的に機能しているとなれば、うれしい限りです。

ところで、私どもは、第1期生全員を対象にしてアンケート2回、個別面談を1回実施しました。昨年7月に実施したアンケートでは、参加者の目標設定と達成度の自己評価も伺いました。そのアンケート結果では、概念フレームワークを含む IFRS の理解の向上、参加者間の交流、英語力の向上が総じて目標となっており、IFRS の理解の向上、参加者間の交流の2つは概ね達成されていると自己評価する回答が多くみられました。また、個々のプログラムでは、概念フレームワークや IASB アップデートが総じて役立っているという自己評価も多くみられました。

その一方で、英語力が思うように伸びていないと自己評価する回答が多くみられました。そのような状況でしたので、事務局で検討し、英語によるディベートに関する特別講座を2013

年1月に2日間14時間にわたり集中的に実施しました。この点については、参加者に追加の時間を割いていただくことになりましたが、評価するコメントが多く寄せられました。そのほか、準備時間の確保や業務との調整に苦勞したというコメントがありました。参加者の中には、自宅ではご家族との関係で集中して事前準備ができず、喫茶店に籠って対応したなどの話も伺いました。ただ、そうした苦勞についてマイナスにとらえるコメントは非常に少なかったと記憶しています。第2期においては、このような第1期生のコメントも踏まえて、プログラムの内容を一部見直しました。

4 会計人材開発支援プログラムから得たものと今後の課題や期待

新 井 では、最後に、皆様に、会計人材開発支援プログラムから得たものと今後の課題や期待について、伺いたいと思います。まず、第1期生の方々に、このプログラムを受講して得られたものや今後の目標をお伺いできますか。今年1月に IFRS 諮問会議の委員になりました熊谷さん、いかがですか。

熊 谷 プログラム B にせよ A にせよ参加メンバーの皆さんは、大変優秀なうえにモチベーションも高い方々ばかりでした。今後、組織や業界を代表して、我が国の会計基準に関する議論をリードしていかれる方々も多いと思います。講師の先生方を含めて、各界の一流の会計人材と出会えたということが、このプログラムに参加して得た大きな財産の1つだと思っております。日本からの意見発信という意味でも、このプログラムで出会った仲間の皆様と、今後も積極的に意見交換させていただけたらと思っております。

さて、2月の末に IFRS 諮問会議と CMAC に初めて参加して参りました。このプログラム

を通じて、2年間にわたって、会計基準の考え方を基礎から学んでいたお蔭で、初めて参加したにも関わらず比較的すんなり議論に参加できたと思います。私の場合、それに加え、ASBJの会計基準アドバイザー・フォーラム(ASAF)対応専門委員会、IFRSのエンドースメントに関する作業部会などに委員として参加させていただいております。IFRS諮問会議に参加してみて、こうした国内の委員会における資料や議論を通じて、ハイレベルな論点からテクニカルな論点に至るまで、実に膨大かつ良質なインプットを事前にいただいていることを改めて実感しました。

鶯地さんや秋葉さんのおっしゃられたこととも通じますが、長年、海外の投資家とお付き合いして学んだことの1つは、日本の特殊性を強調しても相手にはされないということです。国際的にも受け入れられる普遍的なロジックでないと、彼らを説得して日本株に投資してもらえません。それは会計基準の世界でも全く同じであると、2月の会議に出て確信しました。本プログラムで学んだ基礎を応用して、またASBJの各専門委員会等でのインプットを基に、説得力のある意見を自分なりに形成し、国際会議の場でしっかりと発信していかなければならないと痛感しております。また国際会議で得た知見を、国内関係者にいろいろな形でフィードバックしていくことも、私の重要な役目の1つであると考えています。

新井 熊谷さん、ありがとうございます。今年1月からIASBのスタッフとしてロンドンで勤務しています三浦さん、いかがですか。

三浦 講師・参加者をはじめ、財務諸表作成者、財務諸表利用者、監査人の多様な皆様のお話を聞いたことが最大の成果と思っています。自分の経験だけでは視野に限界がありますので、広い意見、高い意見を交換できることは大変刺激になりました。ロンドンのIASBス

タッフとも話すことがありますが、机上で理論的に理想の基準を考えることだけであればそれほど困難ではありません。しかし、今の概念フレームワークにもコスト・ベネフィットの記載があるように、財務諸表作成者・財務諸表利用者等にとっての現実の実務を考慮しなければ、実際に使われない無意味な基準となりかねません。したがって、IASBは関係者の多様な意見を積極的に求めており、スタッフも多様な意見と実務を理解した上で基準に落とし込む必要があります。概念フレームワークや英語の素養もこうした意見を効果的に伝えあうツールとして必要ですので、やはり当プログラムは総合的に素晴らしいものだと感じます。IASBでも、過去の実務経験がやはり一番の強みとなることも実感しているのですが、このプログラムに参加していた当時は、毎日の実務にも高いモチベーションで取り組みましたし、実務では得られない点を補完していただきました。今後については、「季刊会計基準」誌でも今号から報告させていただいておりますが、年金会計(IAS第19号)をはじめとした解釈・適用及びリサーチ・プロジェクトを適切に主導していきたいと思っています。帰国後も、基準整備やIFRSの円滑



IASB 客員研究員/ASBJ 研究員 三浦 朱美氏

な適用に関わりたいと思っています。多様な意見を伝えることはIASBにも有用ですので、関係者にわかりやすく意見や状況を伝えあう役割も果たせればとも思います。

新井 三浦さん、ありがとうございます。昨年から財務企画部門で勤務されています小川さん、いかがですか。

小川 このプログラムを受講して得られたことは、自身の業界や自国の事情だけを主張しても普遍的なルールや説得的な意見とはならないことを痛感したことです。世界に意見を表明するならば、世界で通用するロジックと納得的でフィジブルな結論を導き出すことが必要だと感じました。私は現在、海外M&Aも担当しておりますので、海外の人間が直接交渉当事者となる場合もあります。利益が相反する相手に、いかに筋道を立てて自身の考えを納得してもらうか、本プログラムで経験した時と同様、相変わらず苦勞しております（笑）。当然ではあります。日本の常識は世界の常識でないことの方が多く、普遍的な体系やロジックを構築することの難しさと重要性を肌身で感じております。今後は、金融資本市場の皆様のご期待を感じながら、実務経験を積んだ皆様とのチームディスカッションや、国際舞台で活躍されている講師の皆様からの御指導を胸に、新日鐵住金が真のグローバル企業として成長すべく、中長期的な視点から財務計画の立案・投資判断を自らが提言・実行し、結果として、日本の市場が世界から高い信頼を得、国際化・活性化していくことに貢献したいと思います。

新井 小川さん、ありがとうございます。では、講師の鷺地さんと秋葉さんに、これからの会計人材開発支援プログラムへの期待や課題について、お伺いしたいと思います。

まず、鷺地さん、国際舞台で求められる資質や能力にも触れていただき、このプログラムへの期待や課題についてお伺いできますか。

鷺地 難しいご質問ですね。国際舞台で求められる資質や能力に特別なものがあるとは、特に思っていません。もちろん言葉の問題はありますが、それを除けば、むしろ国内のいろいろな仕事や活動における経験や知識の蓄積が非常に重要だと思います。いくら英語ができて、プレゼンテーションが上手でも、中身がなければ意味がありません。その意味で、国内の関係者との密なるコミュニケーションというのが実は最も大事なのかもしれません。それができないと、外で発言する意味がありません。ですから、まず一般の人に、まず最初に申し上げたいのは、現在のご自身のお仕事を全力でこなして、その経験の蓄積を積み上げてほしいということです。ただ、そうは言っても、いくらその蓄積や、素晴らしいお考えがあっても、それをタイムリーに世界に向かって発信できなければ、意味がない場合もあります。そのような時のためにこのプログラムがあるのだと思っています。つまり、国内で活躍されている方々に、もう一枚、武器となるドレスを着てもらって、いつでも国外でも国内と同様に活躍できるように支援、サポートするのがこのプログラムの役割だと思っています。第2期生の方々にも大変



ASBJ 副委員長 新井 武広氏

期待をしています。ぜひとも自分が国際会議で発言するならば、どういう視点で分析して、どう発言するだろうということを考えてプログラムに参加していただきたいと思います。

新井 篤地さん、ありがとうございます。秋葉さん、このプログラムの第2期でも、引き続き、アカウンティング・プログラムの講師をお願いしていますが、ほぼ毎月、このプログラムの参加者と接する中でこのプログラムへの期待や課題についてお伺いできますか。

秋葉 一般に、優秀な方は、現在の所属でも大変お忙しいはずなので、その合間を縫ってでもこのプログラムに参加することに意義があると感じていただけるように取り進めることが、最初の課題になると思います。何とか、第1期生については対応できていたとすれば、嬉しいのですが。また、そのプログラムに参加した結果が、内外ともに評価されるということが、第2期のみならず、第3期以降もこのプログラムが継続するかどうかのポイントになるでしょうね。このためには、参加者の満足度を向上させることに加えて、周囲の皆様の期待に沿っているかどうかが重要になると考えています。プログラムの参加者には、関係者の問題意識を理解し、前述したような「意見発信」できる力を身につけることができるようになることを期待しています。

が、第1期生においては、IFRS 諮問会議の委員にこのプログラムに参加された熊谷さんが選出されたことや、IASB への出向者1名、ASBJ への出向者1名、ASBJ の様々な専門委員会の専門委員に新たに6名の方が選任されています。また、IASB が基準開発の一環として行っています円卓会議やアウトリーチにも多くのメンバーが参加され、発言形成にあたってこのプログラムが有用であったという声も寄せられています。財務諸表利用者、財務諸表作成者、監査人という様々なセクターの方に参加していただいています。先ほど、お話しがありましたように、緊密に連絡を取り合う中、自ずと人的なネットワークづくりにも寄与していると思われま

す。繰り返しになりますが、我が国において、IFRS 適用会社が予定会社を含め現時点で約40社、東京マーケットの時価総額比で1割を超えて増加する中、我が国の状況も踏まえた国際的な会計基準開発を求めていくことがますます重要な施策となっています。当財団としては、関係者の協力を得て、中長期的な視点に立って、将来的に国際的な舞台で活躍する会計人材の発掘・育成に引き続き努めていきたいと考えています。ご支援ご協力のほど、宜しくお願いいたします。本日は、お忙しい中、長時間にわたり、ありがとうございます。以上で座談会を終了させていただきます。

5 おわりに

新井 秋葉さん、ありがとうございます。本日の座談会に出席された皆さんから、このプログラムを受講されたことを踏まえた今後の目標やこのプログラムへの期待を伺いましたが、現時点において、このプログラムの成果を測定することは時期尚早であり、難しいと考えています。そのような前提を置いたうえで

